

# 住民の参加からみる「まちづくり」の実践 「アートふる山口」の類型化

池田 裕一 (感性デザイン工学専攻) 宮崎 充保\*

## “Art-full Yamaguchi” : A Mode of Practicing “Machizukuri”\*\*

Yuichi IKEDA (KANSEI Design and Engineering) Mitsuyasu MIYAZAKI\*

This paper is an attempt to classify “Art-full Yamaguchi”, an annual event which has been held in autumn since 1996 in the communities on the Ichinosaka River running through the bygone-day heart of Yamaguchi. The event is a remarkable example of community-activated “Machizukuri”. Investigation and examination of its elements was conducted by comparison with those of a similar example in Ikazaki, Ehime, whose movement is considered as successful a community activating movement, as the part and parcel of the so-called “New Social Movement” propagated in 1980’s based, in the main, on the concept of grass-roots movement.

**Key Words:** “Machizukuri” or community activating movement, voluntary activities and participation, events, community-oriented consciousness, grass-roots

### 1 はじめに

「まちづくり」において住民参加は不可欠であり、前提とされるものである。山口市で年一回開催されている「アートふる山口」は住民参加が顕著に見られるイベントである。「アートふる山口」が住民参加の「まちづくり」として成果を挙げていると考え、「アートふる山口」が「まちづくり」として機能していることを示し、住民参加型の「まちづくり」における類型を見る。そして、イベントが「まちづくり」の一つの手法として有効であることを立証することが本論の目的である。そのために「アートふる山口」と五十崎町の事例から住民参加の独自の「まちづくり」の要素を提示し、両者の「まちづくり」は社会運動の一種であると考え、<sup>1)</sup> 1980年代に唱えられた新しい社会運動の理論をもとにして山口市と五十崎町を比較する。

### 2 「アートふる山口」

#### 2.1 「アートふる山口」調査の背景と目的

「アートふる山口」は山口県山口市の一の

坂川・堅小路周辺地区を開催場所として、毎年秋に一回行われるイベントである。1996年10月26日・27日に第1回が開催され、今年の11月3日・4日の開催で第6回目をむかえた。「アートふる山口」は山口で印刷広告業を営む河野康志氏の呼びかけをはじめとして生まれたイベントで地域の住民をはじめとして様々な人々が参画している。すなわち、「アートふる山口」は住民の参加によって成り立っているイベントであり、住民参加の「まちづくり」が実践されている事例である。周辺住民が参加する契機や実際の活動をみることによって、「アートふる山口」が住民参加の「まちづくり」としてどのように機能しているかを考察する。調査は、第5回(2000年9月30日・10月1日)と第6回(2001年11月3日・4日)の現地踏査、開催の中心となった河野康志氏、第6回の実行委員長である小山哲彦氏との面談、山口まちづくりセンターおよび、社団法人山口青年会議所等から提供していただいた資料をもとに行った。<sup>2)</sup>

\*元感性デザイン工学科 (現在経済学部) Formerly KANSEI Design Engineering, now the Faculty of Economics.

\*\*Called so in Japanese to mean the local community activating movement

## 2.2 考察の視点

「アートふる山口」は年一回のイベントであり、祭りであるイベントを手段とした住民参加の「まちづくり」の実践とすることができる。<sup>3)</sup> このことを開催に至る経緯、そして各種イベントからみていく。また、「アートふる山口」を支えている取り組みは、「小さな美術館」、「グルメスポット」、「ふれあいスタッフ」の3つであり、ここに住民参加の実態がうかがえるとして特に注目する。

## 2.3 概要

「アートふる山口」が開催される舞台となっている一の坂川・豎小路周辺は大内文化のゆかりの地である。大内人形や大内塗りなどの工芸は現代に受け継がれ、大内弘世が京都に憧れを抱き一の坂川を鴨川に見立てて京都を模倣した街並みの面影は今も残っている。一の坂川は平成10年に天然記念物指定河川に指定された河川で、ゲンジボタルや桜が鑑賞できる環境を形成しており地域外からの訪問も多く、この地域のシンボリック的存在である。

「アートふる山口」は山口市が有する歴史や自然などの資源を後世に残していきたいという河野康志氏の考えから生まれたイベントである。90年代にはいって様々な文化団体が発足し、それぞれに活動を行っていた。しかし、各団体の催しは参加者が限られているのが現状であった。そういった活況に欠く状況を悩みとした河野康志氏が各種団体の活動を一斉に催し、幅広い市民に参加してもらおうと考えたのである。<sup>2)</sup>

河野康志氏は知人への呼びかけなどの活動をしていくなかで、福岡県浮羽郡吉井町の事例を知り、これを参考にしたのがきっかけとなった。吉井町では毎年5月の連休に「小さな美術館めぐり」というイベントが行われており、住民が自宅を開放しその家に受け継がれている文化財を来訪者に見せるというものである。これは、地域の住人が自ら企画し、実践することによって成立したイベントである。「アートふる山口」の場合、趣旨は、山内文化や毛利文化や明治維新などの歴史を、ソフト面からの伝承に努め、住民が自らの手で新しい山口の文化をつくりだして行くことである。そのために、住民が自由に参加でき、文化芸術活動を実践できる場をつくって、イベントを通してそうした活動を定着させるこ

とを目標としている。「アートふる山口」を支えているのは、山口市がもつ伝統や文化、恵まれた自然、そして、地区内外の住民による自主的な活動である。展示品の出品や自宅を開放して展示をすること、ボランティアでスタッフに参加することなどを通して、山口市の伝統や文化そして自然を再確認あるいは再発見する機会や場が生まれているのである。

## 2.4 開催に至る経緯

「アートふる山口」は河野康志氏の働きかけで、3年の構想期間を経て1996年に第1回目の開催が実現した。河野康志氏は1989年に山口にUターンし、1990年に山口青年会議所に入会し、そこで「アートふる山口」の構想に取り組んだのである。「アートふる山口」の原型となっている吉井町の調査を初めとして、イベントの立案は社団法人山口青年会議所を中心に行われ、実行委員会組織の立ち上げの際には、一般団体や個人の協力も募った。また、イベントの説明と参加募集のために開催予定地区の人々を一軒一軒まわったのである。

当初の住民の反応には、イベントの趣旨に賛同しながらも実際に自宅を開放することへの抵抗や、何を来客者に公開したらよいかという戸惑いがあった。しかし、市街地移動のために空洞化が進み地域に空き家が増え、もともと住民自身が何とかしなければいけないと思っていたこともあって、半年にわたる足をつかった地道な呼びかけの結果、参加者が十分に集まり、開催の目途がたったのは96年の6月であった。その後、「アートふるガイド」(現在の「ふれあいスタッフ」)の募集、チラシの折り込みや配布、マスコミの報道による広報活動を行なっていながら開催に至った。「アートふるガイド」の自己研修には、若い人が訪問して地域住民と話をする機会ができたことや、住民自身の反応の中に自らが役に立つことができる喜びがあることを確かめることができ、開催前から「アートふるガイド」の人たちは地域学習をすることにもなり、地域に貢献していた。

## 2.5 主な内容

### [1] 「小さな美術館」

一般民家をはじめ商店、飲食店、公共施設等を会場(約50カ所)として作品を展示するもので、「アートふる山口」の中心になってい

るといえる。「小さな美術館」では作品所有者や制作者と来訪者が気軽に会話を交わす機会があり、多くの人との交流がそこで生まれる。

展示品は各自が出品するもので、山口市の伝統にちなんだもの現代のもの、趣味で収集しているもの自己制作したものなど様々である。参加方法も多様で、自宅を展示会場として来訪者を受け入れたり[写真1]、軒先に展示品を飾ったり、公共施設に出品したりと様々である[写真2]。第1回目は市外（小郡町、美市、萩市、光市等）からの出品もあった。通常どおりの営業をしながらも来訪者が来れば、普段販売している商品について会話を交わすといったかたちでの参加もある。



[写真1] ちりめん細工の展示



[写真2] 駐車場でバザー

「小さな美術館」を通して住民はイベントへの参加を実感できる。同時に、その実感は多くの来訪者を迎えることで充実感なる。なかには恒常的に展示をしているところもある。

また、単に鑑賞を楽しむだけではなく、作品の鑑賞や実習体験などを通して山口の伝統や文化の再確認や発掘、学習をも兼ねている。また、一の坂川・堅小路周辺地区は大内氏の時代に京都を模倣してつくられた街並みは格子状に構成されている。これが「小さな美術館」を支えている要件の一つである。道が格

子状に張り巡らされていることで散策移動が縦横にできるのである。

## [2] 「グルメスポット」

イベント開催地域の商店・喫茶店を主として行われる。軒先で調理をしたり、飲食スペースを特設したりするなどして来訪者が休憩したり談話したりできる場所をも提供している。[写真3、4]山口の食文化を再現した料理や「アートふる」の名を付けたメニューなどイベント開催2日間限定の料理や弁当の販売も行われる。「グルメスポット」の名称は第3回（1998年）から用いられたものであるが、第1、2回は「小さな美術館」に併設するかたちで用いられていた。



[写真3] 土間に食事スペース



[写真4] 店先での調理・販売

## [3] 「ふれあいスタッフ」

「ふれあいスタッフ」は、一般からの募集や、周辺の高校へ呼びかけることによってボランティアとして集まったスタッフである。もとは吉井町で構想段階にあった企画であり、それを参考にして実現させたものである。主に女子高生で構成され、当日のイベントの案内やピラ配りなどを行う。

今年の第6回では高校生は各部会（小さな美術館部会、イベント部会、広報部会、運営

部会)に分かれ、活動することにもなった。また、事前に数回の研修会によって、開催場所の把握をし、バスツアーで山口の名所をまわり歴史などの勉強をしながら、バーベキューで親睦を深めたりしている。これは、ごく一部の人しか対象にしていないが地域学習の機会として大きな意味を持っている。ボランティアに志願するような人たちであるから積極的であり、山口に対する意識がさらに高まることになる。

#### [4]その他のイベント

山口ふるさと伝承総合センターや菜香亭、「アートふる山口」開催全域などを会場として、実行委員会のスタッフや様々な団体が様々なイベントを実施するものである。菜香亭は100年以上の歴史をもつ料亭であったが、1998年に閉店され、現在は「アートふる山口」で邦楽の演奏会や作品の展示会場等、イベントの場として活用されている。お寺でのジャズの演奏会や路上の落書きなどユニークなイベントもある。日常では得ることができない貴重な体験が可能になっている。[写真5、6]



[写真5] 路上での落書き



[写真6] お寺での演奏会

以上の項目は名称や内容に若干の変化があるが、第1回から第6回を通して行われてきたものである。「アートふる山口」の実行委員

会は当初、開催地域外の社団法人山口青年会議所内にあった。実行委員会自体が開催地域外にあるというのが当時の状況であった。また、単年制度をもつ青年会議所は、年ごとに理事長や体制が変わっていく。そういったなかで、実行委員長は青年会議所の年度ごとの理事長が受け継ぐことになっていたため、「アートふる山口」との関わり方にも年によって差があった。1998年に山口まちづくりセンターが設置され、第4回からは従来の形式を止め、開催地区に基地としての事務局機能が欲しいという要請に応じてセンターに依頼して実行委員会をここに移転させた。それによって、開催地域との連帯が緊密になり、地区の住民がたやすく参加できる仕組みをつくったのである。

#### 2.6 今後の取り組み

「アートふる山口」には観光の要素を強くしていこうという動きがある。イベント当日のみではなく日常的な観光客の足溜りになるような場づくりを目指し、交流人口を増やそうという展望をもっている。回を重ねていくことで、住民自身が地域に自信をもち、恒常的に外部へアピールしていけるように、そのための準備を「アートふる山口」は担っているとも言える。同時に、観光バスの設置や新しくお土産となるものを生み出すことも検討されている。観光面が充実し、観光収入をきっかけとして商業が活気づけば、それにつられて若者の活躍の場がふえて定住人口の増加に繋がる可能性は大いにある。また、若い力が歴史や伝統に現代の要素を加えていくことになり、山口の文化の継承、発展へも繋がっていく。

しかし、これまで「アートふる山口」の内容には目立って大きな変化はない。回を重ねながら、一回性のイベントで終わらないように取り組みを長い目で捉えている。実行委員会自体もマンネリ化を一方では危惧しながらも「ちいさな美術館」を中心にして、イベントは初回のスタイルを保守している。そのため「小さな美術館」は、“おなじみ”、“いつもとかわらない”といった評価が生まれ、むしろ、従来の実践様式に評価が高い。第6回の実行委員長をつとめた小山哲彦氏は、“こういったイベントは10~15回が山となる、今年で6回目となったが、そのとき(10~15回のころ)

にどうあるかが一つの課題”と話す。初回にボランティアスタッフとして参加した高校生も社会人になり、かつての「ハートふるガイド」による若者の人材養成の担い手に成長したという効果が現れてくる時期でもあり、現在を含めて今後数年は実験段階、あるいは課題の整理段階であるとも言える。

## 2.7 まとめ

### 2.7.1 「まちづくり」の要素

「アートふる山口」が住民参加の「まちづくり」として機能しているといえる要素は、住民が活動できる場づくり、住民自身の自主的な活動にある。

#### ①住民が活動できる場づくり

「アートふる山口」は開催場所を公共施設や広場などに限定せずに、日常生活の場を開催場所としているところが重要な点である。普段の生活で通り過ぎる家々を舞台にしているのである。自主的に自宅を開放する住民も多いが、公共施設などへの出品による参加も可能であり、少ない負担で住民が活動できる場をつくることで、学習や文化・芸術活動を支援しているといえる。

#### ②住民自身の自主的な活動

住民の参加、その方法は自由である。スタッフとしての参加もボランティアによって可能であるし、出品する際にも自宅の開放、出品物も自由である。また、出品者としての参加だけではなく、出品物を鑑賞したり、制作の体験をして、住民は自分の意志で制作者にも鑑賞者にもなることができる。

### 2.7.2 「まちづくり」としての評価

以上の二点は住民参加の「まちづくり」の実践において重要な要素である。年一回のイベントである「アートふる山口」はこの二つの要素をふまえて二つの観点から評価できる。

#### [1]開催の場

日常生活の場が開催会場になることで、住民が自分の生活する地域を非日常的観点からみることができる。その過程で、地域がもつ魅力を再発見したり、再確認することになる。いわば、住民自身が眠っていた自己の資源や地域の価値を掘り起こしているのである。そ

うして、地域の価値を改めて知ること、また主催者となって生活の場でその価値の真価を学ぶ来訪者を迎える喜びを感じることは地域への帰属意識を強くし、住民の定住にもつながる。当初は、開催地域外に実行委員会があり、地域外から企画をもちこむというかたちであったにもかかわらず構想を実現させ、現在まで質を高めながら続くだけの成果をあげることが出来たのは、こうした場づくりを実践の中心に据えたからである。

#### [2]展開される住民の活動

「アートふる山口」は民間から生まれた。現在でも住民によって企画、運営されている。行政は山口市役所が350万円の資金援助、広報活動の支援を行うだけで、行政担当者が一個人として参加しても、民間の活動を管理することはない、完全な住民主導である。

「アートふる山口」は住民の創造性を刺激し自己表現を可能にしている。個人がそれぞれ自分の所有するものの価値、地域の魅力、あるいは自分自身の価値観を来訪者に伝える活動が隠れた資源情報の発信源となっている。来訪者を受け入れることが出会いのきっかけとなり、展示作品や実習体験をきっかけとして話題が生まれ、交流が生まれる。そのようにして顕在化した住民固有の価値は、交流によって来訪者と共有され、地域外へも広がって地域特有の個性として形成されていく。イベント参加を通して、来訪者をもてなし、楽しみながら来訪者と地域の個性を認識する。来訪者の喜びを自分の喜びとしながら地域の価値を改めて学習する過程で自分自身が地域に貢献していることを実感していくのである。

「アートふる山口」は住民が自主的に参加している取り組みであり、逆に言えば住民の自主的な活動が一つのかたちに成長したものが「アートふる山口」である。2日間のイベントを通して地域への関心を深めていく。住民が生活の場で自己が帰属する共同体のために創造活動を実践することによって、住民自らが生き生きと活動できる地域づくりを実践しているのである。「アートふる山口」は年一回のイベントであるが、地域の価値の再発見・創造、若者をはじめとした人材養成、住民参加のあり方など「まちづくり」に必要な取り組みが住民の自主活動によって行われて

いる。住民が参加しやすいかたちで「まちづくり」のきっかけを与えていると同時に、イベント自体が「まちづくり」運動の実践になっている。このような実践から判断すると「アートふる山口」は住民の参加による「まちづくり」として機能しているといえる。

### 3 五十崎町の事例

#### 3.1 五十崎町調査の背景と目的

五十崎町（愛媛県喜多郡）では、1967年に東京から帰郷した亀岡徹氏が1983年に開講した「よもだ塾」をはじめとして現在までに様々な活動が実践されてきた。その成果が顕著に現れているのは、1988年の国際河川シンポジウムをきっかけに、日本に初めて河川の護岸工法に「近自然工法」を導入したことである。田村明氏は著書『まちづくりの実践』（岩波新書 1999）で、一例として五十崎町の活動を扱っている。そこで述べられているのは、五十崎町の住民自身が自主的に協議したり活動する意志を持つまでに成長して、当時では考えられなかったことを実践を通してやり遂げたことである。<sup>4)</sup>

五十崎町の実践は住民の自主的な活動によるものであり、住民参加型の「まちづくり」が成功している事例である。住民参加型の「まちづくり」を通して、住民自身が望む生活環境を得るためにどのような活動が行われているか、ここではとりわけ、田村明氏の見解をもとにしながら五十崎町の実践から住民の活動を見ていく。「よもだ塾」の世話人である亀岡徹氏との面談、小田川の実地踏査、町づくりシンポの会から提供していただいた資料をもとに五十崎町の活動過程と並行してその活動の原理を見ていき、<sup>5)</sup> 住民参加の「まちづくり」としてどのように住民の活動が機能しているかを考察する。

調査 2001年10月14日・15日（亀岡氏との面談：15日）

#### 3.2 考察の視点

五十崎町の実践で最も興味深い取り組みが「よもだ塾」、「町づくりシンポの会」である。ここに、五十崎町が成功した住民参加の「まちづくり」の原点を見ることができる。こうした集団がなぜ、先例にないようなことを実現させてしまうほどの力をもっていたのか。この手がかりは、徹底した自由と住民の記憶

にある原風景である小田川にあるものと考える。

#### 3.3 概要

五十崎町の主な取り組みは、小田川と流域住民との関係から発している。小田川（幅約160m）は肱川の支流であり五十崎町の中心を流れている。河原の左右には幅20m～40mの高水敷があり、そこが様々なイベントの舞台になっている。300余年の伝統を持つ大凧合戦は現在でも毎年5月に行われ、遠近から数万人の人々が河原に集まる。大凧とともに手すき和紙の伝統工芸も育まれている。また、小田川周辺には様々な俳人の句碑がある。河原の榎には正岡子規が詠んだ「雨晴れて一本榎 凧高し」と書かれた句碑があり、俳人が句を詠むほどの風情が小田川にあったことがうかがえる。そのほかにも夏の花火大会、秋のいもたき、かぐや姫共和国祭り、日曜市などが行われてきた。現在ではほとんど見られないが、漁業や遊泳の場でもあった。

五十崎町の住民活動の原点ともなっているのが、亀岡徹氏が開講した「よもだ塾」である。住民間のコミュニケーションの欠乏を問題に思った亀岡氏をはじめ、小田川に関心を持つ住民が「よもだ塾」、「町づくりシンポの会」に参加し、自主的に行動を起こして行った。

まず、住民は自由に発言する場所を得る。そして、町について考え、話し合い、活動を起こす母集団となっていく。同じ価値観を持つものが集まれば、実践に移しやすい。その中で異なる考えを持つものもいても修正や妥協を重ねながら発展につなげて行った。そうした環境が五十崎町に生まれたのである。また、活動の積み重ねがさらなる行動力につながり、継続する力にもなる。そうした力は、問題が生じた時に解決の方向を模索し、解決に向かう段階で勉強を重ね、様々な分野の人間との出会いをも生む。活動を通して、住民だけではなく行政関係者等の関心を集め、さらには行政関係者が当たり前としていた意識や考え方にも変化を迫る影響を与えたのである。こうして、住民を主体とした行政と住民による「まちづくり」が実現したのである。以下に主な取り組みを挙げながらこのことを見ていく。五十崎町の取り組みから住民参加の「まちづくり」の実践を見ることができる。

### 3.4 主な取り組み

#### [1]「よもだ塾」

1983年～現在

1983年に亀岡徹氏によって開かれた「よもだ塾」は、言葉によるコミュニケーションの回復を目的としたものだった。酒造会社の社長である亀岡徹氏は、酒の原料となる米のことで農家の人と話をしてもいつも曖昧になってしまうことをきっかけに“語学学校”の感覚で「よもだ塾」を始めた。参加は自由なのでいつも数人の参会者しかいなかった。お酒を飲んだり、花札をしたりして、まずは会話することを目的にしていた。集まりは場所も時間も不規則で、いつも他の会合の合間をぬうようにして行われていた。このころ、「まちづくり」は視野にはいっていなかったが、集まって自由に話を交わす場と機会ができたことに意義がある。

#### [2]「町づくりシンポの会」

1984年12月22日～現在

1984年11月11日に行政と住民が一体になって取り組み「五十崎町合併30周年記念行事町づくりシンポジウム」が開催された。それを“シンポジウムで終わらせてはいけない”という亀岡徹氏の考えで、「町づくりシンポの会」が彼を世話人として翌12月に発足した。「町づくりシンポの会」も「よもだ塾」と同様に徹底した自由を原則として、200円の入会費を払えば会員になるというものだった。また、「町づくりシンポの会」は以下の四つのことを原則としていた。<sup>5)</sup>

- ① やりたいものがやりたいことをやりたいようにやる
- ② 自前であること
- ③ 多数決はとらない
- ④ その都度実行委員方式をとる。

こうした原則のもとで参加した住民は、役割を与えられることなくそれぞれ自由に議論していた。「町づくりシンポの会」が定期的に関われる一方で、その合間に「よもだ塾」も不定期に継続して開かれており、シンポの会の会員は散会ののち、そこでさらに話し合いを深めることもあった。

#### [3]「かぐや姫共和国祭り」

1984年8月～1994年

1984年に、小田川でコンクリートによる護岸工事が始まり、河原の榎が伐採され始めた。それを目の当たりにした流域住民は反対運動の手始めに他の住民の小田川への関心を高めるために開催したイベントである。「かぐや姫は小田川の竹林で生まれたのであり、月からの里帰りを記念して祭を行う」といったユーモラスな発想がコンセプトだった。中学生をかぐや姫に仕立てて町を練り歩き、子どもはちょうちんをもって行列を組んだ。子どもの参加に合わせて親も参加する状況がつくられたのである。また、マスコミや政治家を呼び、マスコミの目の前で政治家にちょうちんを持たせてはやしたて、「五十崎町で小田川運動始まる」といったようなかたちで、行政関係者を始め人々を巻き込んでいった。

#### [4]「いかざきの日曜日」

1984年4月～1995年

住民の小田川への関心を維持するために親水運動として、小田川の河原で毎月一度行われ、一度におよそ200人の参加者が訪れていた。市は住民があり合わせのものを持ち寄って、ピクニック感覚で市を楽しんでいた。それを面白がって、多数の人が集まった。

以上のことはすべて、住民が自ら企画し、自ら実践したものである。他にも水辺の散歩として、魚調べ、草花調べ、小田川ウォークラリー、バードウォッチングなどが実施された。「よもだ塾」、「町づくりシンポの会」の徹底した自由の気風や、「かぐや姫共和国祭り」のコンセプトなどのユーモラスな発想に五十崎町の「まちづくり」への取り組みの特徴をみることができる。コンクリートによる護岸工事始まっていることを住民に周知徹底させるために折り込んだチラシもユーモアを交えて、「ことわりもなく、小田川の榎を切りせし者、死に至る病を得るであろう。かつ、これを実施させし理事者は、次の戦に必ず敗れるであろう。自由民主党 予言本部長 亀岡徹」<sup>5)</sup>と書かれたものだった。

また、従来の会合は、簡単な説明や伝達で済まされることが多く、つつこんで話を訊くと村八分にされかねず軽い会話しかできない場を自由に発言できる場と機会に改めたことは住民運動には不可欠である。また、一人の

人間が引き金となったことにも注目しなければならぬ。亀岡徹氏は、五十崎町の「まちづくり」について“五十崎藩の藩づくり哲学”として次のような理念を持っている。<sup>5)</sup>

「大項目」

- ①美しい自然
- ②美しい人
- ③美しいネットワーク

「細目」

- ①人は信用せず愛すること
- ②多数決は存在しない。おのれ一人の力で登ること
- ③言葉でもって人が説得出来るなどと言う妄想をいだいてはならぬ
- ④いのち、金、地位、名誉は舞台の上の小道具にて演ずる劇がなければ元々必要なきものなり

これについて町づくりシンポの会が提供してくださった資料に次のような説明がある。<sup>5)</sup>

①「美しい自然」は、美しい小田川を未来へ残す運動をいい、上記した親水運動が主な活動内容と成果である。

②「美しい人」は、「よもだ塾」の開講にもつながっており、“自由に向かって飛び立つ「いくさびと」を「美しい人」と規定する。”といい、“思想や知識は、使用（行動）されなければ、納屋にある釘箱の釘にしか過ぎない”といった表現で実践することの必要さを含ませている。また、運動については“研修→すりあわせ→理論化→思い込み集団→実践化→研修と、ラセン階段の如く、少しずつ高みへと移動してゆく運動体である。その運動体は、自由無限空間を形成する”ものであり、“その無限空間へ向かって投げかけて企てる「存在」を、‘自由’と呼び‘美’と呼ぶ。この時、自由は美と一致する。”としている。

③「美しいネットワーク」は、“種々の日常の「しくみ」を十分に活用できる網状の組織体の構築”を目指すものである。また、“美を基本とした沢山のセンサーを自ら造り出しながら、これを武器として、産業界に勇敢に自由に斬り込んでゆく産業”そうして“藩財政の半分以上は自力で賄うべき”ともいっている。風土を見直すことで価値を見だし、その価値を多様な視点から捉え、そこから新しい産業を呼び起こそうというのである。

徹底した自由の根底には以上のような理念が働いている。これは、人材の育成や住民の原風景である小田川が共感を生むという予測、地域の経済活性化を視野に入れたものである。

次に住民の実践が活動の発端となり、行政を巻き込んでいった主な活動を見ていく。

[5]全国・海外への自費研修

小田川の護岸工事をめぐって活動を起こすなかで、「町づくりシンポの会」の参加者が国内、および海外（ヨーロッパ：1986年7月、87年6月、88年6月）の河川状況を視察にいった。河川への関心は誰もが強く、会合の合議で目的地を決定し、自費で視察したのである。この視察報告をもとにして直接建設省に護岸工事のあり方についての提言を持って行った。また信州大学で生態学を研究している桜井善雄教授に近自然工法を紹介してもらい、スイス、ドイツへの研修へ展開していく。<sup>\*</sup>これは、後の「スイスと五十崎・川の交流」シンポジウムの開催を実現させる。また、並行してシンポジウムやフォーラムを行い他県との交流も図った。<sup>\*\*</sup> 信州大学の桜井善雄教授をはじめ、スイスのクリスチャン＝ゲルディ（河川保護建設課長）、通訳の山脇氏、その紹介者等この時期は特に人材に恵まれていた。この偶然は、住民の積極的な行動に支えられていることは考えるに難くない。

[6]「小田川原っぱ石一個条例」

1986年7月

小田川の護岸工事をコンクリートではなく玉石で行うという試みで、住民が一人一個の漬け物石を持ち寄るという活動である。これは、「美しい小田川を未来に引き継ぐ石一個提供運動」（1986年6月）を始まりとして呼びかけたのがきっかけであり、シンポの会に参加していた議員が動いて条例として制定された。

<sup>\*</sup> スイス（チューリッヒ）ツール川・テス川・グラット川・リマット川、旧西ドイツ（ボーデン）ボーデン湖

<sup>\*\*</sup> 主な研修先 山口県岩国市錦川・山口市一の坂川、高知県高知市鏡川・奈半利町、宮城県仙台市広瀬川、岩手県遠野市、宮崎県宮崎市大淀川・綾町、鹿児島県宮之城町、大分県竹田市緒方川・清川村・湯布院町、福岡県柳川市、長野県小布施町・信濃大町市 等

## [7] 「いざぎ小田川はらっぱ基金」

1987年6月～現在

「小田川原っぱ石一個条例」で持ち寄った石では大きさに不具合があり、使用不可能であるということを受けて、コンクリート護岸から玉石護岸への変更のためにかかる差額を住民が基金（一人1000円）として集めて埋め合わせようというものである。多額の出資者もいて、住民から2500万円集まった（当時の人口はおよそ6000人）。こうした運動に応えるようにして、小田川（五十崎町内の2.1km）は1987年12月に建設省に“ふるさとの川モデル河川”に指定された（1989年6月認定）。玉石護岸工事は結局、国が従来の工法を見直したために国費で施工された。そのために基金は、小田川の清掃やイベントの費用に回すことができた。その後も「小田川の自然環境を、保全・再生・創造し、子孫に引き継ぐのに必要な経費を積み立てるため」（「いざぎ小田川はらっぱ基金条例」第2条より）として積み立てられ、現在では1億円を超えている。

## [8] 「スイスと五十崎・川の交流」シンポジウム

1988年10月26日

スイスへの自費研修がきっかけとなって、五十崎町で国際的なシンポジウムを開催するに至った。シンポジウムに参加した建設省の関正和氏が強い関心を持ち、スイスで用いられている「近自然工法」を日本でも導入することが決まった。1990年には各自治体に「多自然工法」（建設省の呼称）を導入するように通達された。この、シンポジウムの後も年一回のペースで国際水辺環境フォーラムとして、各地と交流を図っている。\*

五十崎町の実践がきっかけとなって導入された「近自然工法」は、日本の河川事業のあり方を一変させた。100年に一回の災害に備えることで欠けていた自然環境への配慮を再確認させたのである。また、流水改善のために河川の形状を直線に近づけ、コンクリートで整備するという工法は、河川沿いの住民す

ら積年の願望であった。効率化志向の中で、機能を重視するのみで景観を無視した、画一的な護岸工事を行っていた行政の姿勢を改めさせたことは大きな成果である。

## 3.5 五十崎町の今後の取り組み

五十崎町の今後の取り組みは、「水制」と「観光」である。「水制」は現在、実験の段階にある。“うま”を設置するなどして水勢や土砂のたまりを調節し、水質の向上を図り魚の生息を促すというものである。亀岡氏は面談で、次のような観点から観光を捉えている。

観光一光（風土）をみる。改めて風土を見つめ直そうというものである。

- みる ・ 観る 街並み
- ・ 見る テーマパーク
- ・ 看る 体験
- ・ 視る 視察、研修

ここでは特に「看る」、「視る」に視点をあてている。住民自らが、改めて感動を覚えるような機会を設けようというものである。そのために、体験や学習が可能な施設の設置を考慮中である。危険回避のために遊泳禁止の状態にある中で、子供はもちろん、施設を通して住民をいかに小田川に近づけるかが一番の目的である。

上述の観光の捉え方から、地域外からの人寄せが目的でないといえる。体験学習を通じた人材育成や住民の小田川への関心、愛着心の喚起、小田川が子どもたちの原風景になるような企画等を考え、地域外への知名度の向上や経済的な効果などにとらわれることなく住民の意識向上を第一に考え実践に移そうとしている。

## 3.6 まとめ

## 3.6.1 「まちづくり」の要素

五十崎町の活動は、行政の施政への反対運動にとどまることなく、住民が合議し自主的な活動によって実践したことに意義がある。こうした活動を実践に移すことができた根源的な要素は次の通りである。

## ① 難しいことを言わない

住民が誰でも気軽に参加し、発言できる環境を生み出した。「まちづくり」を難しく考

\* 1991年10月北海道、1992年10月豊田市、1993年10月高知市、1994年9月内子町、同年月沖繩県、1995年10月スイス・ドイツ

えずに、思い思いのことをやっていく姿勢が最初の一步を後押しして、継続を生んだ。「かぐや姫共和国祭り」をはじめとした様々なイベントは、護岸工事や自然保護について難しい言い方をしなかったことが、住民のより多くの参加を促すことになった。五十崎町の実践にはユーモラスな発想がうかがえる。「都市計画」という用語から住民向けの言葉として使われるようになった「まちづくり」がもつ“手軽”で“わかりやすい”といった住民運動の側面をここに見ることができる。

## ②自由な発言・活動ができる

「町づくりシンポの会」の方針にみられるように、活動主体がカ所に集中していないことで多くの発想が生まれ、ネットワークに広がりができる。一方で亀岡氏のような柔軟な思考を持ったリーダー的な存在が重要であることも忘れてはならない。個人の発言や活動を自由にすることは実践に結びつきやすいので個人レベルでの意識の高揚が起こる。自主性が生まれ「とりあえず、やってみよう」という思考が変わる。また、考える機会を与え人材育成もする。

### 3.6.2 「まちづくり」としての評価

先の二つの要素が五十崎町の活動を住民参加型の「まちづくり」として機能させている。

五十崎町の「まちづくり」を大きく二段階に分けて考えてみる。第一段階は、「よもだ塾」、「町づくりシンポの会」にみられる住民意識の変革をねらいとする実践である。第二段階は住民の“草の根的”な活動が行政を動かし、「近自然工法」を取り入れた護岸工事を実現させる過程である。

#### [1]第一段階——住民の意識を変革する

「よもだ塾」の開講は自由な発言の気風を生んだ。「よもだ塾」の後に発足した「町づくりシンポの会」も同様である。五十崎町ではこうして異なる思想や立場をもった人間が集まり自由に発言し、行動する環境が整ったのである。そして、活動は他の地域への交流にもつながり、そこでもまた、新しい刺激を受け、何かを学ぶのである。だが、住民の動きが自主的で開放的になっていくと、バラバラになりまとまりをつけるのが困難になってく

る。そのために、亀岡氏の言われる「自由を尊重した理念・哲学」をしっかりと打ち立てているのである。さらに重要なのは、住民に共通の価値観が存在するかどうかである。五十崎町の場合、小田川が共通の価値観を生み出している。それが住民の運動活動の原動力である。

小田川のコンクリート護岸工事に対して、反対運動に留まらず住民自ら立案、それを実践してきた根底には小田川に対する価値観の共有が強く作用している。亀岡氏ひとりの取り組みが住民意識に変革が見られ、価値観は共有されるようになり、住民ぐるみの活動が展開した。

#### [2]第二段階——「まちづくり」の実践、活動の継続

住民の熱意と自主的な継続する活動は様々な専門家や行政関係者との関係を作りだし、ネットワークを広げて行った。つまり、第一段階の土台を強化することになる。亀岡氏は「運良くいい人との出会いが続いた」と話す。それは住民の自主的な活動がなければ得られなかった成果である。

五十崎町の活動は住民が発端となっているが、行政参加が不必要であったというわけではない。条例を制定することには政治的、社会的影響を与え、住民意識の向上にも効果がある。<sup>6)</sup>むしろ、行政に頼らないと不可能な実践であったことは明らかである。初めから行政依存ではなく、住民自身が小田川の自然に強い関心を持ち、何をすればいいか考えて自ら資金を工面し行動に移し、それを積み重ねていったことが「まちづくり」の原点なのである。小田川の護岸工事の際に河原には目的別に4つのゾーンが設けられた[写真7～10]。護岸工事の際に住民が使用できるスペースを設置したことからも、住民が小田川を生活の一部にしていることがわかる。

五十崎町の取り組みは、一言で言えば「よもだ塾」、「町づくりシンポの会」を通して、住民が自由に発言、活動できる環境を作って、自主的な活動を行うようになったことである。亀岡氏の功績は住民の閉鎖的な共同体の「ムラ」意識に、「マチ」意識を入れたのである。集団の中で個人が尊重されるようになり、共同体は開放され外部との交流も盛んになったのである。



[写真7] スポーツゾーン



[写真8] イベントゾーン



[写真9] 親水ゾーン



[写真10] 散策ゾーン

#### 4 二つの事例の比較——1980年代に唱えられた社会運動論から

##### 4.1 「新しい社会運動」

「新しい社会運動」(New Social Movement)はフランスの社会学者アラン・トゥレーヌが1960年代後半以降に現れてきた新しいタイプの社会問題群(女性解放問題・反原子力運動・エコロジー運動等)に対してあてた言葉である。ここでは、「新しい社会運動」理論に依拠して「アートふる山口」と五十崎町の事例を比較する。<sup>7)</sup> その類似と相違から「アートふる山口」を類型化してみる。高田昭彦氏は80年代にみられる社会運動を「草の根運動」の展開という観点から論じている。「草の根運動」は従来の社会運動をより小さな単位で捉えたものであり、現代の「まちづくり」の源流になっているという論理に注目した。

##### 4.2 二者の比較

「アートふる山口」と五十崎町の事例を“住民参加”の「まちづくり」という視点から比較する。比較する項目は、①活動の動機・目的 ②住民の参加形態——行政との関わり ③活動の成果とする。[表1]

##### ① 活動の動機・目的

「アートふる山口」も五十崎町も最初は地域の現状をみて、〈なんとかしよう〉と考えた一人人間の行動に始まった。「アートふる山口」は、イベントの開催が視野にあって、すでに様々な文化活動をしていた団体や地域住民の協力を得て活動が始まった。地域の伝統や文化の伝承、自然の保護が視野にあったが、イベントの開催そのものが目的であった。

五十崎町では、「よもだ塾」がコミュニケーションの回復を目的に開講されたのが最初であるが、小田川でコンクリート護岸の工事が行われたことをきっかけに小田川の自然を守ることを目的として活動が生起した。「かぐや姫共和国まつり」などのイベントは今ではすでに行われなくなっているが、亀岡氏はインタビューの中で“「かぐや姫共和国まつり」は継続されなかったが、住民の関心を小田川によせることに充分役目を果たした”と言っている。五十崎町は自然を残した護岸工事という一つの具体的な目標に向かって、さまざまな実践を行ってきたものであり、「アートふる山口」は、イベントの開催自体が目標であり実践であると言える。しかし、その根

〔表1〕 二者の要素の比較

|          | 五十崎町                             | アートふる山口                                    |
|----------|----------------------------------|--|
| 活動の契機    | 亀岡徹氏（東京からUターン1967年）<br>「よもだ塾」の開講 | 河野康志氏（九州からUターン1989年）<br>住民への呼びかけ           |
| 活動の動機・目的 | コミュニケーションの回復<br>小田川の自然保護         | 地域の伝統や文化の継承・自然保護<br>イベントの開催・継続             |
| 住民の参加形態  | 会合への自由参加<br>自主的な活動               | 出品者、鑑賞者、スタッフ等のイベントへの参加                     |
| 行政との関わり  | 住民の基金運動が条例化<br>国に護岸工法を見直させる      | 市から資金援助（350万円）、用途は自由                       |
| 活動の成果    | 「近自然工法」の導入<br>住民がよく発言するようになった    | 地域の歴史や伝統、自然の価値が顕在化した<br>住民間、他地域との交流が盛んになった |
| 今後の取り組み  | 観光（住民に向けて）                       | 観光（外部に向けて）                                 |
| 活動の期間    | 「近自然工法」の導入：1983～1990<br>～現在      | 調査・準備、第1回の開催：1993～1996<br>～現在              |

底には地域独自の価値を保全し、利用するという共通した理念がある。運動の発生について梶田孝道氏は次のようにいっている。

新しい社会運動のなかには、「市民社会」の防衛・拡大、とりわけ「市民的自由」の防衛・実現という文脈で理解できるものが多い。この種の運動は、市民社会を構成する市民を市民たらしめている普遍的価値、つまり自由、平等、友愛等を防衛・実現しようとするものである。現実には、これらの普遍的価値が危機に瀕することに起因して運動が発生することが多い。<sup>7)</sup>

また、草の根レベルで運動をみる高田昭彦氏は、「運動は個人が日常生活の中で、ある問題を発想し個人レベルでそれに取り組むことに始まる」としている。「特定のグループが推進するのではなく、共通の価値観を持つ個人がネットワークを形成し様々なグループに参加していく」というのである。<sup>7)</sup>

山口と五十崎は両者の理論を具現している。換言すると、この二つの事例は、住民が地域に対して強い関心を持つようになったこと、そして住民に共有される価値観を再発見、創造し、住民間でまとまりをつくり問題に取り組む体制を作りだしたことに意義があることを語っている。

両者の今後の取り組みは地域の資源を利用した観光にあることが共通している。ただ、

五十崎町はその住民に向けての取り組みであって地域外からの集客は考慮していない。対照的に、「アートふる山口」は、地域外からの集客が要諦となっている。「アートふる山口」を通じて、交流人口を増やし、地域の良さを多くの人々に知ってもらうと同時に、工芸品などの地場産業製品をお土産にすることによって経済効果や地域個性作りもねらっている。

## ②住民の参加形態——行政との関わり

両者に共通して言えることは、住民の参加自主性である。

「アートふる山口」では、住民の参加は主に「小さな美術館」への参加であり、参加方法には様々な選択肢がある。また、企画者とその享受者としての参加もある。行政からは援助金を受けているだけで条例の制定等もなされておらず、地域の住民、あるいは地域外の人々によって運営されている。住民は自宅を開放したり、出品物等を準備する程度で、負担は非常に軽い。専門的な知識や段取りは実行委員が請け負い、住民は普段着で参加できる。

五十崎町では、会合に参加しそこで話し合われたことを実践するというかたちで進められてきた。会員制といったものはなく、その場にいる人が会員になるのである。会合では自由な討論をし、その都度参加者によって実

行委員会が形成され、それぞれが自ら行動するというかたちである。住民による玉石護岸工事のための基金運動は基金条例の制定につながり、最終的には護岸工事に対する国の方針を変えるに至った。護岸工事は行政力なしでは不可能なものであり、五十崎町の取り組みには行政の力が必要であった。

新しい社会運動では、運動標的は国家や行政である。草の根運動も同様に、テクノクラートや行政に対する異議の申し立てとして行われるとされている。しかし、本論中の二つの事例は権力への対抗としての運動ではない。地域が抱える身近な問題に対して住民が自律的に活動したのであり、国家や行政はほとんど関与していない。だが一方では、住民の実践にあたっては資金の工面、技術や知識の導入の面で行政や専門家の力が必要なことも指摘できる。比較の点では「アートふる山口」は五十崎町ほど大きな技術や資金は必要としていなかったといえる。

### ③活動の成果

「アートふる山口」の「まちづくり」としての成果は住民間、そして地域外との交流が盛んになったこと、地域の歴史や伝統、自然の価値が顕在化したことにある。インタビューでは河野康志氏、小山哲彦氏はともに“多くの人と知り合うことが出来た”のが成果だと話してくれた。さらに河野氏は“当初はまねごとであり、目玉となるものはなかったが終わってみれば参加者の人柄や地域の個性など多くのものを発見できた”と話す。また、継続していることも成果の一つである。

五十崎町は、日本の護岸工事の工法に「近自然工法」を導入させたことが成果であり、同時にイベントなどを通して小田川への関心をさらに強いものにした。その理由としてインタビューで、亀岡氏は“とにかく人がものを言うようになった”からだと話してくれた。また、これも五十崎町の「まちづくり」の成果を語る証言である。

両者ともに言えることは、住民間のコミュニケーションが強くなったこと、地域外とのネットワークが広がったことである。これによって、住民の発言機会が増しそれが反映した「まちづくり」へと繋がったのである。また、他の地域との交流によって外部からの視点で地域を見ることができて、そこからこれまで

になかった知識やノウハウなどの情報を得ることができるようになったのである。これが草の根運動としての「まちづくり」において重要である。住民の関心を高め、参加の機会を作ることで住民による「まちづくり」は始まるのである。「アートふる山口」が一回のイベントで終わらなかったのも、開催の準備期間、あるいはイベント自体を通してここで述べたことが確実に実践されてきたからである。

### 5 「アートふる山口」の類型

「アートふる山口」の類型は、①年一回のイベントである ②地域に根付いていることをはじめ、住民の趣味等をテーマにしている ③住民自身が行い組み立ててイベントを運営している ④住民の日常生活の場で展開しているという4点を特徴とする住民参加型の「まちづくり」である。「アートふる山口」が一回で終わらなかったことが、「まちづくり」として成り立っている大きな要因である。五十崎町の事例に見られるように、本来「まちづくり」は長い期間（五十崎町は1983年の「よもだ塾」に始まる）をかけて行うものである。しかし、「アートふる山口」は比較的短期間（1993年に構想が生まれる。実際に調査等が開始されたのは1995年）でこれまで述べてきた成果を挙げている。イベントの利点は、多くの人に参加しやすいことである。短期間で自由なテーマを掲げ、多くの人を呼び込み、住民だけではなく地域外の人々の関心を引くことができるからである。また、時間や資金をそれほど必要としないので実践に移しやすい。「アートふる山口」の継続性は地域住民を中心に活動を展開して外部に頼りきらないこと、住民が自らの手で行い楽しく参加できるということ、そして地域の価値を顕在化させそれを住民に実感させることから生まれている。言い換えればこの力こそが住民の活力であり、「まちづくり」のエネルギーである。

本論では二つの事例を扱うに留まったが、「アートふる山口」が「まちづくり」として機能していることを明らかにする試みであった。また、その類型を探る過程で、イベントが住民参加型の「まちづくり」の一つの有効な手段であることが明らかになり、その有効性をつくり出す要素を見ることができた。今日の「まちづくり」は、身近な地域に小さい

「まち」をつくること、すなわち、共同体を形成し住民が自主的に参加できる環境を作ることが重要だと言える。

#### 謝辞

小論を書くにあたって、インタビューに応じていただいた亀岡徹氏、河野康志氏、小山哲彦氏、また、資料を提供していただいた五十崎町の町づくりシンポの会、山口まちづくりセンター、山口青年会議所の方々には大変お世話になりました。深く感謝いたします。また、かつて政府のシンクタンクとして「まちづくり」にも関わりを持たれたことがあって、社会運動論の視点の示唆してくださった三浦伸也氏に心から感謝の意を表します。

#### 参考文献・資料

- 1) 佐藤和江 須永和久 日置雅晴 山口邦雄 『市民のためのまちづくりガイド』 学芸出版社 2000
- 2) アートふる山口実行委員会 『アートふる山口事業報告書』 1997 『企画運営部会資料』 1999、2000、2001 『パンフレット』 第1回～第6回 『アートふるガイド用会場案内』 1996 『アートふる山口 一の坂大路小路をあそぶ』 1996 『アートふる山口からの手紙』 2000 7月、8月、10月； 2001 10月
- 3) 田村明 『まちづくりの発想』 岩波新書 1987
- 4) 田村明 『まちづくりの実践』 岩波新書 1999
- 5) 亀岡徹 『五十崎藩の藩づくり哲学』 『五十崎・川のルネサンス』 『小田川をめぐる町づくり』 『町づくりシンポの会 あらまし』 『桜井善雄 水の風景』 『関正和 大地の川』 『矢野徹志 蔵元の文化戦士たち 亀岡酒造を訪ねる』 『酒屋がはじめた町づくり』 愛媛新聞 1988 2月24日
- 6) 渡辺俊一 『市民参加のまちづくり マスタープランづくりの現場から』 学芸出版社 2000
- 7) 梶田孝道 「新しい社会運動—A・トゥレーヌの問題提示をうけて—」 『思想』 岩波書店 1985 4月号  
高田昭彦 「草の根運動の現代的位相—オルタナティブを志向する新しい社会運動」 『思想』 岩波書店 1985 11月  
町村敬志 「都市社会における構造と主体—社会運動のロマンチズムをこえて—」 同誌  
高橋徹 「後期資本主義社会における新しい社会運動」 同誌  
片桐新自 「戦後日本における運動論の展開—理論的観点からの整理—」 同誌

(平成 13 年 12 月 27 日受理)